

---

# 水も滴るいいオトコ。

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水も滴るいいオトコ。

### 【Nコード】

N4348G

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

中学生平和。平和スキー祭りの時期に投稿してしまったものの再アップです（笑）。すみません。

今にも降りだしそうだと思っていた、厚い鈍色<sup>にひ</sup>の雲。そこからし  
とすと雨が落ちてきて。いつのまにか  
小雨が大粒に、変わっていった。

「うわ、すごいな…」

両親も出かけて一人。留守番もしながら、アタシは2週間後に控  
える試験の対策のために机に向かっていた。

今は重要やと思うところに緑のラインを引いていく作業。教科書  
をにらめっこしながら緑のペンを構えるその手を止めて、アタシは  
思わず外を見やった。

外は珍しく強い風が吹き荒れ、水滴が幾度もガラスに叩きつけら  
れる。

11月も終わりに珍しく起こる突風に、この強い雨。この寒さに、  
この冷たさに。

きつと自分やったらどうにかなっているかもしれない。自分は部屋  
の中にいたからいいものの、これが道を歩いていたというのなら、  
たまらないやろう。きつと傘を持っていたも、この雨じゃセーラー  
服の肩口や靴など濡らしてしまうかもしれない。つくづく自分はお  
となしくテスト勉強をしててよかったなあ、だなんて考え、くすりと  
小さく笑った。

そうしてアタシは再び羅列された文字に緑の線を入れ始めた。

今回のテストでは特に力を入れていた。なぜならテストで全ての  
教科を90点以上取れば、携帯電話を買ってくれると両親が言うて

くれたから。携帯電話はクラスの女子で持っている子が半数以上で、ずつとずつと持ちたいと思てた。なのに、「まだオマエには早い。家の電話でええやろ」なんて言われて絶対うんとは言ってくれなかった。

それがどうい風風の吹き回しか、テストでええ点数取れたら買うてやるなんて言うて。全ての教科を90点なんて取れるわけない、つてたかをくくってるんやろか。

せやけど、見てとき。アタシには強い味方がいてるんやから。

アタシは一人ほくそ笑むと、線を入れる手を止めて、壁に飾られた写真を見つめた。幼馴染の平次。

大阪に出来たばかりのテーマパークに、去年2人だけで遊びに行った時の写真。肌黒いその顔に、真つ白く光る歯が映えて。ホンマええ笑顔しとる。・・・平次も、そして、アタシも。

・・・アタシは思わず口元に自然と笑みが浮かんだ。

平次が。彼が力になってくれる言うたんや。いやいやながら、やけど。せやけど、万年学年1位の平次が勉強教えてくれる言うたら百人力や。

それに、何でかわからんけど平次が傍にいてると元気が沸いてくるんや。やる気が起こるんや。まるで栄養剤のような存在。きつと平次がいてくれるんやったら何でもできる気がする。せやから・・・。

「アタシ、頑張るで。平次」

そう強く思てアタシは再び机に向かう。もう、煩惱は抜きや。絶対90点やのうて100点取って父や母を見返すんや...!

そんな決意を胸に秘めつつも、熱いコーヒーの入ったポットを力

ツプにゆったりと注いだ。

外はざあざあの雨と、びゅうびゅうと唸る強い突風。ホンマ嫌な天気やわ。

窓の外を見ながら、ふうふうと息で熱を冷まし、熱々のコーヒーに口をつけようとしたところで、アタシはある人物を発見し、驚いて思わず吹いて、あと少しで上唇を火傷しそうになった。

遠くからやってくる見慣れた赤い自転車と、それに乗ってるのは今考えていた幼馴染。

しかも、折れた傘なんて持って。

「あのアホ、何やってん……」

いつもあほあほ言われてるけど、今日はアタシが言う番や。こんな雨に、自転車で。折れた傘も持ったまま、一生懸命向かってるんは、多分アタシの家。

きい、という自転車が止まる音に、あたしは慌てて、洗面所に向かい、ありったけのフェイスタオルと、お父ちゃんのおつきなセーターと、朝の犬の散歩の時に使うジャージを胸に抱え、玄関のドアを開けた。

……いた。平次が。チャイムに今指を押そうとしていたときのようで。目を真ん丸くさせてアタシを見ている。

「何や、おもしろいな」

まず第一声がそれやった。頭の前からつま先までびちょ濡れなヤツのまず第一声がそれや。

「…何がや？」

「何でもや。チャイム押さんと、何でわかった？」

「アンタの姿が見えたからや」

「ああ…何や。…そらそやな」

ぷつと笑って、アタシが差し出したタオルを受け取って、玄関前で頭を拭く。ザカザカと髪の毛を拭くもんやから、水滴がアタシの腕や首筋まで飛び散って。もう、何やねん、やなんて思うて。

「こんな雨の時なんかにわざわざ来んでよかったのに。…何しに来たん？」

「何や、ナマイキなやつぢやなあ…。陣中見舞いや。ホレ」

濡れた鞆の中に入っていたのは、あつたかそうな肉まん、問題集。それが彼の手から、アタシの掌に渡される。

あつたかい肉まんが掌に伝導し、いい香りが鼻腔に伝わって。彼の氣遣いに思わず問題集と肉マンを抱きしめて。ありがとと小さく言った。やから、憎めないんや、平次は。

やのに。平次はアタシの顔を見ずに口を尖らせたような物言い、このたもつた。

「留守番やゆうたから。…家に来てもらお思たけど、来れないんやったらしゃーない。オレが行ったるか、って思て。そう思て、家出たまではええけど、途中から天気悪うなつて。おかげで風も強うなつたし、買ったばかりのビニル傘折れたわ」

どうしてくれんのや。そう目が物語っていて。そんな視線で睨まれば、こつちだってそんなん、アンタの勝手やろ、なんて憎まれ口の一つでも出てしまいそうになる。やけど、それを言う前に、再

び平次は愛嬌のあるスマイルを浮かべ、言葉を続けた。

「まー、それで点数取れたらオマエに傘でも何でも買ってもらえええんやし？オマエのおとんやおかんが知らん間にいっぱい頭詰め込んでこーや。な、先手必勝や」

どうしてやろう。タオルの下から、にっと笑う彼のその笑顔が眩しくて、一瞬ドキリとして、アタシはさっと背を向けた。まったく人の心を上げたり下げたりさせる、いやらしいヤツや。

「・・・今あつたかいお茶用意したるから…早よ部屋入ってそれ着て待ってて。サイズ大きいかもしれんけど。背が伸びたゆうけど、まだまだお父ちゃんには敵わんみたいやし」

プライドが傷ついたんやろか。アタシの言葉に、タオルで頭を拭いていた手を止めて、ぎろり、真正面にアタシを睨む。

一瞬、その視線にドキリとして。せやけど、平次にしては珍しく、ええ言葉が見つからんかったんやろか、そのまま黙って再び髪の毛を拭き始めた。…その沈黙が嫌やわ。アタシは慌てて逃げるようにして部屋に入った。そして暖房を入れる。

リビングにエアコンとストーブを点けると、二つの効果ですぐに暖かい風が部屋に吹き始める。

「暖かくしといたで……ひゃー！」

振り返れば、一瞬心臓をぎゅっと捕まれた。平次は既に上半身裸で。浅黒い平次の体が、たくましい平次の体が。突然目の前に、視界に入ってしまったって、思わず慌てた。というか、何も考えられなくなつて。慌てて、悲鳴に近い声を上げていた。

「なっ・・・な、何してるんっっ！」

「アホー。何って濡れたから着替えるん当たり前やろ。そのつもりでオマエのおとんの服貸してくれたんやんか。何言うてんねや」

呆れた表情で平次は鼻で笑うた。それから、ホイ、とアタシの手に、びちよびちよに雨に濡れた服を掴ませて。

せやから、そんな体見せんというて、ってば。アタシは慌てて背を向けた。

「わかったから、早よ、部屋に入り！風邪引いてまうから！それから、ズボンも、廊下に投げとけばええから・・・」

「パンツは平気やから」

「あた：当たり前や！！」

かあぁと赤くなって、アタシは台所まで早足で。平次の顔なんてもう見れなくなって。

手に持っていたびちよびちよに濡れた服は洗濯機の中に放り投げ、それから、蒸気した顔をさつと平次に気づかれんように、冷や水で冷やして。どきどきした気持ちを何とか抑えようとした。

好きなん？いや、違う。この気持ちは好きなんやない。

このドキドキはきつとそんなんやない。ただ、見知ってない平次を知ってしまっただけや。成長してしまった平次を知ってしまっただけや。

「もう、何なんよ・・・」

ほんの1年前はホントにひよっこい体してたのに。今じゃイッチヨマエに男っぽい体なんてして。剣道のせいかな、筋肉なんてつけち



やって。どこに視線移せばええかわからなかったやないか。

「平次のアホ」

こんな雨のときにわざわざ来るからや。アタシのためになんて来るからや。それでびしょ濡れになって。そんな見せなくてもええ裸なんて見せて。…一体何したいのかわからんわ。

「アホアホアホ平次」

思わずボソリと呟いた。籠の中の上着はびしょ濡れで。滴る水滴を見つめながら、アタシは小さく溜息をつく。そうして、頬をぺちりと叩いて洗面所を後にした。気合を入れな、仕方なかった。せやかて、こんなんで動揺したらアタシの負けや。

「かずはー、濡れてるGパンやけど、スマン、これも頼むわ」

不意に聴こえたその声に、心の準備もなく反射的に振り向けば、ビチョビチョのGパンを持ってパンツ一丁でやってきた平次に、アタシの脳天はとうとうオーバーヒートした。

>  
f  
i  
n  
·  
<

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4348g/>

---

水も滴るいいオトコ。

2010年10月9日23時11分発行